

広島県立美術館

研究紀要

第19号

南薫造の《津波》について	角田 新	1
ブータンの工芸調査ノート	福田 浩子	9

2016

BULLETIN
OF
HIROSHIMA PREFECTURAL ART MUSEUM

No.19

On "Tsunami" by Kunzo Minami KAKUDA, Arata	<i>1</i>
Research Note of Art Craft in Bhutan FUKUDA SIDDIQI, Hiroko	<i>9</i>

2016

HIROSHIMA PREFECTURAL ART MUSEUM
HIROSHIMA JAPAN



(左) 口絵1 肩掛け(ラチュ)
ブータン製、ラオス採取 257×33cm、広島県立美術館蔵



口絵2 両面縫取織(表)
(口絵1 部分)



口絵3 両面縫取織(裏)
(口絵1 部分)



口絵4 両面縫取織(表)
(口絵1 部分)



口絵5 両面縫取織(裏)
(口絵1 部分)



口絵6 端の飾り織り
(口絵1 部分)

ブータンの工芸調査ノート

福田 浩子

1 はじめに

平成28年5月に東京・上野の森美術館を第一会場として開幕・巡回し、平成29年11月2日から12月24日に当館を最終会場として開催される特別展「ブータンーしあわせに生きるためのヒント」展の企画準備の一環として、平成27年9月にブータン王国を訪問し、出品作品の確認と調査を行った。本稿は現地訪問によって得た事柄と、その後の展覧会準備過程を通じた知見のごく一部を報告するものである。

南にインド、北に中国といった大国に挟まれた、ヒマラヤ南斜面に位置するブータン王国。2011年11月、第五代国王ジグミ・ケサル・ナムギャル・ワンチュク陛下とジェツン・ペマ王妃が日本を訪問した。たつての希望により国王夫妻は福島県相馬市を訪問、また、同国から東日本大震災への義捐金100万米ドルの寄付が行われた。日本では一躍ブータンブームが巻き起こり、「幸せの国」として注目を集めた。というのも、ブータンは、物質的・経済的な成長が必ずしも幸福に結びつくわけではないという考えの元、その発展の度合いを測るのにGDP（国内総生産）ではなく、GNH（国民総幸福量）を提唱している。ジグミ・シンゲ・ワンチュク第四代国王の治世に確立されたこの考え方は、今や世界で注目されるようになった。

ブータンは、7世紀に仏教が伝来し、8世紀にインドの密教行者グル・パドマサンバヴァが到来し、ヒマラヤ全域に仏教が急速に浸透して、ブータン全土に様々な宗派が發展してきた。17世紀にドゥクパ（雷龍）・カギユ派の高僧シャブドゥン・ガワン・ナムギャルにより政権が統一され、チベット系大乘仏教を国教とする国家が確立された。ブータン人は自らを「ドゥクパ（龍の人）」、自国を「ドゥクユル（龍の国）」と称する。宗教とともに展開したブータンの歴史や文化は、多くが仏教と深く関わりを持っている。短い日数に出会ったブータン人たちからは生活に深く根ざした仏教、人生観・思想としての仏教を感じた。彼らのアイデンティティーは仏教と密接に結びついている。



図1 パロのホテル内の祭壇
仏教信仰はブータン人の生活に深く根ざしている。

特別展「ブータンーしあわせに生きるためのヒント」は、ブータンの伝統や文化、ブータン人の世界観や価値観を紹介する展覧会として企画された。より幸せに、より心穏やかに生きてほしいという現代日本人へのメッセージが込められている。

展覧会は3つの章で構成され、現地にて筆者はブータンの生活様式の章に展示予定の作品・資料を実見させていただいた。定められた日程の都合上、残念ながら今なお伝統文化が色濃く生きているに違いない地方都市や辺境を訪れることはできなかったものの、唯一国際空港のあるパロと首都ティン

プーというブータンの二大都市を訪問し、パロのブータン王国国立博物館、ティンブーのテキスタイル・ミュージアムをはじめ、織物工房や各種の工房を見学した。



図2 パロの大通り



図3 ブータン王国国立博物館を望む
(中央円形の建物)



図4 パロとティンブーの県境の門



図5 パロ・ティンブー間の川
魚釣りは禁じられている



図6 ティンブーの大通り
警官が手旗信号で交通整理



図7 首都ティンブーの中央政庁兼寺院 (ゾン)



図8 ティンブーの中央郵便局
航空便郵便物は日本まで約1カ月かかる



図9 ブータンの伝統的な建築物建設中



図10 伝統家屋の壁画装飾

2 ブータンの民族衣装と染織概要

(1) 民族衣装 キラとゴ

ブータン独特の民族衣装は魅力的だ。九州とほぼ同じ約38万平方kmの国土に標高200メートル台の亜熱帯気候から、北部の7500メートル台の高山気候まで見られ、多様な動植物が生息している。このような生態系がもたらす多種多様な素材を活かし、民族衣装が作られ、現在に至る。

女性の主な民族衣装はキラ。150×250センチメートル程の布を身体に巻くようにして帯を締めて着付ける。下半身は日本の着物のシルエットに似る。日常着のキラは縞や格子などだが、お祭りや儀式には彩りも鮮やかな、手織りのとっておきのキラが参集する。両肩には大振りな銀製ブローチのコマ(図13)をつけるのだが、上着と肩掛けを着用する正装ではコマは見えない。

男性の民族衣装はゴという。丹前にも似た大きなゴを、おはしよりをたっぷり取って、帯を締めて着る。着方は書物や今回の展覧会展示物で紹介されているため省略させていただく。かつては懐にナイフや木椀などを入れて持ち歩いていたというが、現代ブータン人のおはしよりには、携帯電話やスマートフォンも入っている。

伝統的な民族衣装は現代になって急速な変化が現れているようだ。外部とのチャネルが少ないブータンではあるが、テレビやインターネットなどの影響だろうか、西洋風の衣服が増加するなかで、民族衣装の衰退を危惧した先代国王の勅令により、1988年から公的な場での民族衣装着用が義務付けられている。民族衣装の着用の習慣を維持すること、民族衣装を構成する布や金属製品の生産を保護することが大きな目的であった。今回の訪問でも、空港到着時から民族衣装の空港職員に出迎えられたところから始まって、政府の役人、車のドライバーや通訳・ガイド、博物館の学芸員やスタッフ、ホテルや食堂、商店にいたるまで、働いている人は皆、民族衣装姿であったことには感銘を受けた。学校へ通う子どもたちの制服も民族衣装である。ティンプーのゾン（中央政庁兼仏教寺院）で見かけた、政府高官が右腰に刀を帯び、色鮮やかな刺繍のブーツを履いて登庁する姿（参考・図11右）には特に感動した。

一方で、働く人たちの間では簡略化した民族衣装が広く普及しているようで、ハーフキラ、ハーフゴと呼ばれている。これは日本の二部式着物のように上下を分けて着用する。ハーフキラは巻きスカートと上着で構成されており、ブラウスの上に上着テゴを着て、合わせ目をブローチ（図12）で留めるか、裏側を安全ピンで留める。伝統的なキラ（ハーフキラに対してフルキラと呼ばれる）の着用使用する銀などで作られた金属製の留め具（コマ）（図13）のデザインを思わせる、小型のブローチが多い。フルキラはワンピース状のため上着なしで着用することができるが、ハーフキラは上着を脱ぐことはできない。ハーフゴは下半身のみ民族衣装つまりスカート状で、上半身はTシャツなどの洋装となる。



図11 男女の正装

右はダショークラスの男性正装。ラック染めの深赤の肩掛けカムニ、ブータン靴、右腰に剣を下げる。左は女性の正装。女性の場合は肩掛けラチュを左肩にかける。テキスタイル・ミュージアム、ティンプーにて。



図12 上着ウォンジュ用ブローチ
主にハーフキラ着用時に使用。伝統的なコマを縮小したデザインで作られている。径4.8cm。個人蔵。



図13 コマとジャブタ

伝統的なキラを着用する際の留め具とそれらをつなぐ鎖。裏側につけられた向かい合った鉤に前と後の布を引っかける。銀に鍍金、コマの径7.0cm。個人蔵

(2) ブータン・テキスタイルの主な素材

ヒマラヤ南斜面に位置するブータンは、高山から亜熱帯まで幅広い自然環境を背景に、バラエティに富んだ動植物が存在している。ブータンでは様々な素材が見られるが、特徴的な素材を紹介しておく。

野蚕(ブラ)

ブータンでブラと呼ぶ野蚕は人々にとっては憧れの素材である。宗教上の理由により、殺生を嫌うブータンでは、蚕が食い破った繭を紡いで糸にする。ブラで織られた民族衣装のキラヤゴの生地は厚手で独特の味がある。

ヤク

硬い上毛と柔らかで保温性の高い下毛が得られ、暖かく撥水性のある毛織物は寒冷地での使用に適している。尻尾の毛は、ラマ僧の払子にもなる。

イラクサ

ブータン人は19世紀まで、多くの人イラクサで作られた白い布の衣服を着ていた。棘のあるイラクサから繊維を取り、衣服や袋、風呂敷、弓の弦などが作られてきた

(3) 染料

ブータンでは動植物を利用した天然染料による染色が行われてきた。一方で周辺地域から化学染料も流入している。代表的な天然染料を数種紹介する。

リュウキュウアイ(琉球藍)

日本の藍はタデアイであるが、ブータンの藍は沖縄と同じリュウキュウアイが使われている。タデアイはタデ科イヌタデ属で、リュウキュウアイはキツネノマゴ科イセハナビ属。

アカネ(茜)

アカネ科の蔓性多年生植物。通常、茜は根を染材とするが、ブータンでは蔓も使う(図14)。黄味のある赤色を染める。

ラック

ラックカイガラムシを養殖し、その分泌物から得られた染料で深い赤を染める(図15)。藍と重ね染めで紫も染められる。染料を取った後に残る樹脂(シェラック)は封蝋や強力な接着剤として、ブータン工芸や生活の様々な局面で使用される。かつては主要輸出品の一角を占めていたが、近年では虫の生命を扱う仕事として従事者が減り、生産途絶直前の危機となっているという。インド、東南アジア、中国南部といったアジアの広い地域で生産されているが、その生産は激減しているとの報告がある。



図14 ブータンのアカネ
蔓または根を短く切ったもの



図15 ブータンのラック
枝ごと採集したラックを砕いたもの。

ウコン (鬱金)

黄色を染める代表的な染料の一つ。ショウガ科ウコン属の多年草で、根を黄色染料として用いる。カレーなどにスパイスのひとつとして使用され、薬効により薬としても用いられる。

(4) ブータン 3種の機

ブータンでは次のような3種類の機を使い、手織りで民族衣装等が織られている。

腰機^{こしはた}パンタ

腰にベルトをかけて^{たていと}経糸を保持しながら^{よこいと}緯糸を通して織るタイプの機 (図16、23)。ブータンでは膝をパン、機をタ、この機をパンタと呼ぶという。パンタで織った布3枚を横方向に接ぎ合わせて1着のキラとなる。ブータン東部で盛んに織られ、西部でも東部出身の女性たちによって織られている。



図16 腰機パンタ
経糸を機と腰で保持する。横から見ると経糸は直角三角形をなす。

高機^{たかはた}

1930年代に王室の女性によって、チベットから導入されたとされる高機ティタ。ウールやヤクの毛を織るのに使用され、ティタで織る織物はパンタよりも幅が狭い。そのため、ティタで織った布は10~十数枚を接ぎ合わせて1着のキラとなる。ブータン中央部ブムタンはウール産地として有名。

カード織り

木や革、紙などのカードに穴を開け、経糸を通し、カードを回転させ、緯糸を通して織る (図17-20)。帯や紐に適した織物を織ることができる。ブータンでは都市部を中心にレントゲンフィルムが利用され、4つ穴である。



図17 カード織り
機の構造は腰機パンタに同じ。カードが綜統の役割となる。写真提供：青木薫氏



図18 カード織りのカード
帯一本分のカード一式。フィルムと厚紙が混じっている。1セットは100~120枚程度。2015年ティンブーで入手。



図19、20 カード織りのカード
ほぼ正方形のカードに穴を4つ開け、それぞれに経糸を一本ずつ通す。上のカードの中には、手などの骨の画像が残るフィルムがあった。

(5) 文様を織り出すテクニック

かためんぬいとりおり 片面縫取織

キラの平織部分に施される文様の多くは片面縫取織である。文様部分の経糸をすくい、色糸を入れて文様を表す技法(図21)。経糸の密な平織に色糸が通るため、裏面に色糸は現れない。色糸で面を埋める技法をサンマ、チェーンステッチやクロスステッチのように線を表現する技法をティマという。生命の樹文(シンロ)など経糸を不規則に拾って織り出す文様は特に難しい。



図21 片面縫取織
経糸をすくって色糸を入れる



図22 片面縫取織の裏側
色糸を裏側に出し、織りあがった後に始末する

りょうめんぬいとりおり 両面縫取織

片面縫取織と異なり、裏面に色糸が現れる縫取織。肩掛け(ラチュ)や儀式用布(チャスイ・パンケブ)などに見られる(口絵2-5)。

たてうきおり 経浮織

地と文様になる経糸をあらかじめ準備して機に仕掛けて、必要な経糸を拾い出して文様を表す技法(図23)。経浮織の布はゴに多く用いられ、配色によってアイカプル(赤地に白と黄)やルンセルマ(黄地に赤と緑)のように呼称される。



図23 経浮織の製織
縫取織等の技法と併用することも多い。

3 当館所蔵のブータン織物 肩掛け(ラチュ)

今回の展覧会準備中、当館館蔵品にブータンの織物作品があることが判明した。これは旧蔵者がラオスで入手したところまでわかっていたものの、収蔵時には産地特定に至らなかったのだが、青木薫氏よりご指摘いただいたものである。

ブータン正装では、男性は肩掛けカムニ、女性は肩掛けラチュを着用する。カムニは一般人は白

地、ダショーと呼ばれる位の高い人はラック染めの深赤、王は黄色など、色彩が決められている。ラチュは概して赤系統の地色で、絹や野蚕（ブラ）が使われ、キラ同様の各種の織り技法による文様や刺繍が施されている。肩掛けとしてだけでなくおんぶ紐としても使われたそうである。以前は幅広だったが、近年では細幅になる傾向が見られるようだ。官公庁を訪れる時、高僧に会う時など、民族衣装には肩掛けが必須である。大臣面会のために国会議事堂入場の際に現地通訳が肩掛けを忘れ、大慌てで他の人から借りるという場面があった。

当館蔵の唯一のブータン織物は、女性用の肩掛けラチュである（口絵1-6、図24）。絹地に野蚕（ブラ）で縫取織が施されている。経密度約40本/cm、緯密度約14本/cm。経糸にラックの赤、黄、藍、白の四色を経縞とし、両面縫取織で部分的に文様を表した部分と色糸を織り幅いっぱいにした部分がある。また、フリンジに近い部分には二色の糸を織り込んで端処理する。



図24 肩掛け（ラチュ）（部分）
ブータン製、ラオス採集。
全図、部分詳細は口絵参照。

4 おわりに

ブータンは展覧会準備以前には渡航経験もなく、このたびブータンの工芸、特に驚嘆すべき織物の世界を垣間見る機会をいただいた。現地訪問、文献、ブータンに長らく関わって来られた日本人の方々に導かれて、世界でも稀な世界観・価値観を有したブータンに向き合うことで、様々な発見があった。政府高官たちが事あるごとに、彼らが若い頃に出会った「ダショー西岡」のエピソードを披露したのは印象的であった。現地で最も有名かつ敬愛されている日本人、西岡京治氏は1964年にコロンボ・プランにより農業指導者として里子夫人とともにブータンに赴任し、亡くなるまで28年間の長きにわたり、現地の農業振興に尽くした植物学者で、外国人としてただ一人ダショーの地位を受けた人物である。

ブータンは長年鎖国政策を取っていたが、1957年に大阪府立大学助教授であった中尾佐助がお忍びで来日中のブータン王妃に直談判して翌年に現地調査が行われた。鎖國中・開国直後の中尾氏や西岡夫妻がブータンへ赴いた頃とは社会は移り変わり、世界の情報がリアルタイムに流入する時代となった。先代国王の勅令による民族衣装着用、政府・王室による伝統文化の保護振興も徐々に姿を変えていることが短期間しか接していない筆者にも見て取れる。すでに野蚕（ブラ）やラック、織物に使う糸などの原材料は国外からの輸入に頼っているように見える。インドではブータン人好みの色柄の機械織りの布を生産し、マーケットにかなりの比率を占めるようになった。ブータンの人々もいやおうなく近現代の流れに飲み込まれているのだが、それでも手間や時間を惜しまない精緻な織りの世界が続くことを願う。短期間の調査とわずかな知見でブータンの深遠な文化や染織の世界を語り尽くすことは到底できない。拙文を契機としてブータンとブータンのテキスタイルへの理解が少しでも深まる

手がかりとなれば幸いである。

(広島県立美術館主任学芸員)

主要参考文献

中尾佐助、西岡京治『ブータンの花』朝日新聞出版、1984年

マーク・バーソロミュー、とみたのり子(訳)『ブータンの染織—バーソロミューコレクション』紫紅社 1985年

Diana K. Myers (ed.) , *From the Land of the Thunder Dragon : Textile Arts of Bhutan*, Serindia Publications, 1994.

山本けいこ『ブータンの染と織』染織と生活社、1995年

西岡京治、西岡里子『ブータン 神秘の王国』NTT出版、1998年

山本けいこ『ブータン 雷龍王国への扉』明石書店、2001年

Thagzo : The Textile Weaves of Bhutan, Royal Textile Academy, Thimphu, Bhutan, 2013.

久保淳子『ヒマラヤ大自然の恵み ブータン王国の伝統染織と天然染料』ヤクランド 久保淳子 2014年

久保淳子『ブータンの染織紹介 旅で出会った布と人』ヤクランド 久保淳子 2016年

謝辞

同展の開催準備および本稿執筆にあたって、ブータン王国国立博物館National Museum of Bhutan 館長のMr. Khenpo Phuntsok Tashiケンポ・プンツウオク・タシ氏、同館上席学芸員Mr. Singye Samdrupシンゲ・サンドウツプ氏および同館スタッフの皆様、ブータン王国政府関係者の皆様、広島県出身で現在ブータン在住の青木薫氏、ヤクランド主宰の久保淳子氏、手織工房SOXの工藤いづみ氏、株式会社東映事業推進部シニアプロデューサーの西澤寛氏をはじめ、国内外の多くの方々のご教示とご協力をいただいた。ここに記して感謝の意を表します。

写真

口絵1、図24 オーシマ・スタジオ撮影

口絵2～6、図1～16、18～23 福田浩子撮影

図17 青木薫氏写真提供